

岡 村 遺 跡

—亀の川中小河川改修工事に伴う弥生遺跡発掘調査概報—

1988・10

財団法人 和歌山県文化財センター

序 文

岡村遺跡は、海南・和歌山両市にまたがって所在する亀の川流域における弥生時代の大集落です。

このたび、和歌山県土木部が亀の川中小河川改修工事を実施するにあたり、当センターが県土木部から事前発掘調査の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに調査を実施しました。

調査の結果、近畿地方では出土例の少ない銅鐸形土製品や弥生時代の青銅製空玉^{うつろ}をはじめ、往時の生活の一端を明らかにする多数の遺物が出土するなど、多くの成果をあげることができました。

ここに、その成果の一部を概要報告書として刊行することになりましたが、本書が研究者の方々のみならず県民の皆様のご参考になれば幸いと存じます。

最後に、この調査を実施するにあたり、ご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

昭和63年10月

財団法人和歌山文化財センター

理事長 仮 谷 志 良

例 言

1. 本書は、亀の川中小河川改修工事に伴う岡村遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は和歌山県土木部の委託を受け、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 調査は和歌山県教育委員会の指導を受け、調査委員舘磨正信・巽 三郎・都出比呂志・藤澤一夫各氏（和歌山県文化財保護審議会委員）の指導・助言を得た。
4. 調査は財団法人和歌山県文化財センター埋蔵文化財課主査山本高照、技師黒石哲夫・土井孝之・井石好裕・河内一浩が担当した。
5. 調査に際しては、県土木部和歌山土木事務所の協力を得た。
6. 出土遺物の整理にあたり、次の各氏から種々の御教示を得た。
佐原 真（奈良国立文化財研究所） 中村貞史（県立紀伊風土記の丘資料館） 前田敬彦（財団法人和歌山市文化体育振興事業団）
7. 本書の執筆は調査担当者全員が分担して行い、各文末に執筆者名を記した。本書の編集は井石が担当した。
8. 本書で使用した遺構の記号は溝－SD、土坑－SK、石垣－SVである。遺構および遺物に付した番号は、本文、実測図、写真図版の全てに一致する。
ただし、100番台の遺物は写真図版のみである。

本文目次

1. 位置と環境……………1
2. 調査の経緯と経過…2
3. 調査の位置と概要…2
4. 遺構と遺物……………3
5. まとめ……………13

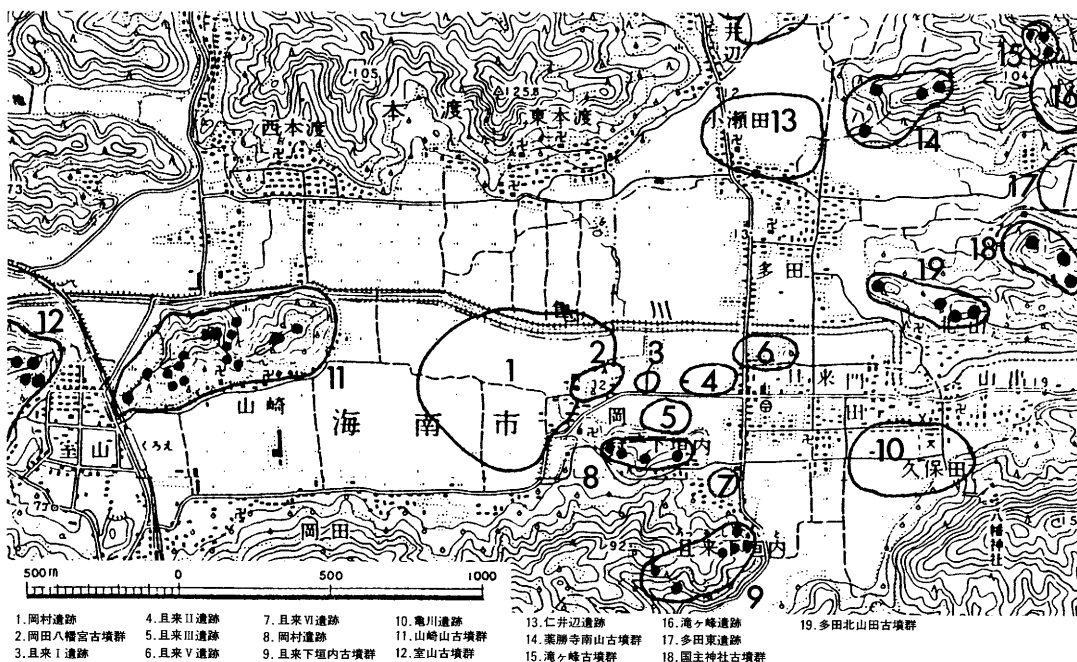
挿図目次

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 第1図 岡村遺跡位置図…1 | 第8図 石垣断面模式図……………10 |
| 第2図 調査地点位置図…2 | 第9図 石垣裏込め出土遺物…10 |
| 第3図 基本層序模式図…3 | 第10図 銅鐸形土製品実測図…12 |
| 第4図 SV01実測図……4 | 第11図 1区出土遺物実測図…15 |
| 第5図 遺構全体図…5～6 | 第12図 2区出土遺物実測図…16 |
| 第6図 2区縄文時代
遺構図……7 | 第13図 3区出土遺物実測図…17 |
| 第7図 SD15土層図……8 | 第14図 4区出土遺物実測図…18 |

1. 位置と環境 (第1図 図版1)

遺跡の位置 岡村遺跡は海南市岡田を中心とした一帯に広がる集落遺跡である。遺跡周辺の地形は、和歌山東山地の西端に辺り、大小の独立丘陵が点在し複雑に入りこんだ地形をみせている。これらの独立丘陵の間を縫って亀の川が西流し小沖積平野を形成しており、遺跡は宮山と称される小独立丘陵の北西裾を中心とした標高6～8mの微高地上に位置する。遺跡の北辺を貫流する亀の川は新川とも呼ばれ、江戸時代の改修工事によって現在の流路が確立されるまでは、門田から北西に流れ、本渡（和歌山市）の南を流れていたものと考えられる。

周辺の遺跡 亀の川流域には数多くの遺跡が密集して存在しており、当流域に集落が形成され始めるのは、且来遺跡群（3～7）・亀川遺跡（10）などの調査成果から縄文時代後期前葉まで遡るものと考えられる。弥生時代から古墳時代前期にかけて、岡村遺跡・且来遺跡・亀川遺跡は、弥生時代後期の滝ヶ峰遺跡（16）と相互に関連する。それは、紀の川流域の遺跡群でも見られるような弥生時代中期の集落の拡大が岡村遺跡でも認められ、弥生時代後期前半では高地性集落（滝ヶ峰遺跡）の存在が目立つ。反面、平野部の遺跡では、この時期集落の在り方が不明確となっている。再び、平野部の遺跡において遺構・遺物が明確になるのは、後期後葉から庄内式併行期に至ってからのことである。古墳時代中・後期には岡村遺跡を取り囲む丘陵上に山崎山古墳群（11）・室山古墳群（12）を始め、小規模な古墳群が形成されている。 (土井)



第1図 岡村遺跡位置図

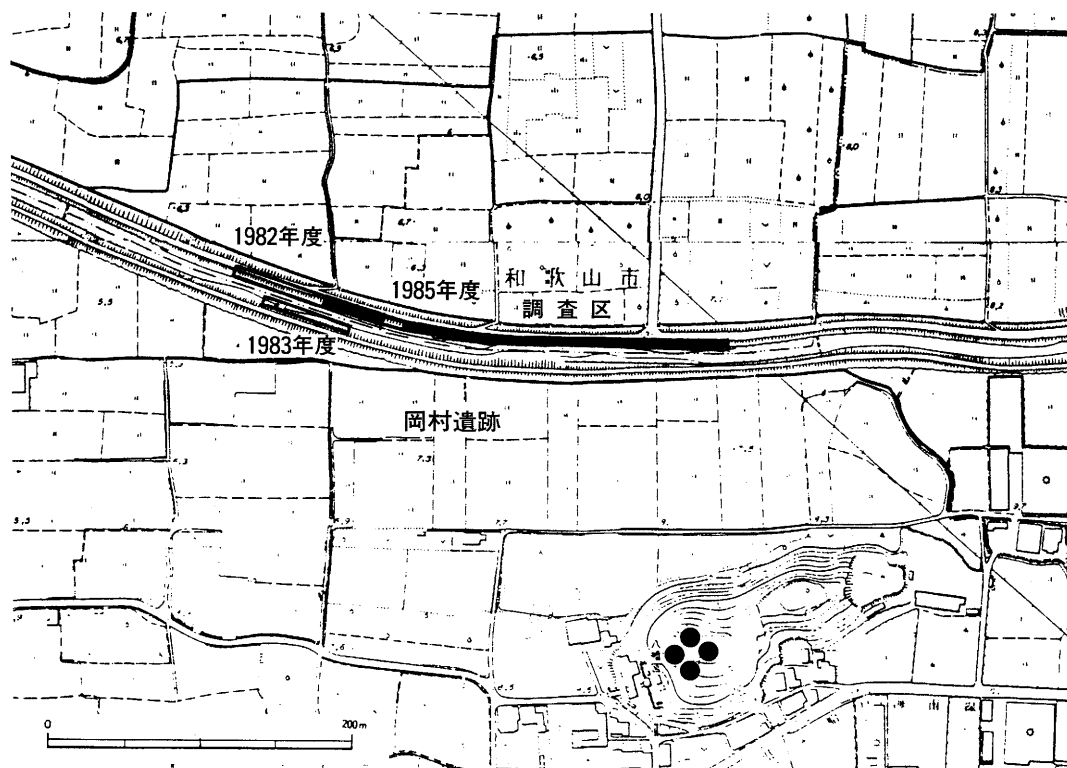
2. 調査の経緯と経過 (第2図)

岡村遺跡は亀の川流域における弥生時代の拠点集落遺跡である。当遺跡については、昭和52年度から4年間、海南市教育委員会が遺跡の範囲確認と歴史的消長を明らかにするための基礎的調査^{註1}を行ない、貴重な成果が得られている。また昭和57・58年度には亀の川の左右両岸で、河川改修工事に伴う調査が社団法人和歌山県文化財研究会によって実施され、弥生時代前期の溝等が検出^{註2}されている。

今回の発掘調査は、県土木部が昭和40年度以来実施している亀の川中小河川改修工事に伴うもので昭和57・58年度の調査と一連のものである。調査は県土木部から委託を受けた財団法人和歌山県文化財センターが、現地調査を昭和63年4月15日から同年5月31日まで行ない、その後、概要報告書作成のための出土遺物整理を実施し、昭和63年10月31日をもって事業のすべてを終了した。(山本)

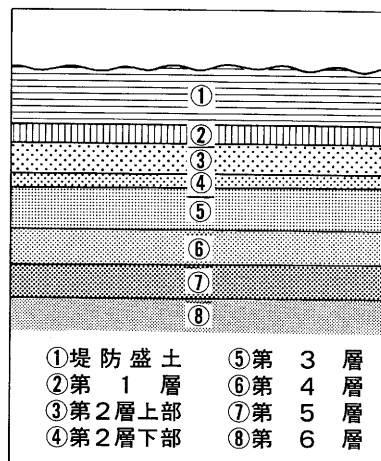
3. 調査の位置と概要 (第2、3、5図)

今回の調査地は、昭和57・58年度および昭和60年度の発掘調査地点の東側にあたる亀の川北岸の堤防部分で、総延長約260m、幅約3mを測る細長い調査地で、西側から1区、2区、3区、



第2図 調査位置図

4区に地区割りを行なった。昭和52年度から54年度にかけて^{註3}海南市が実施した範囲確認調査の成果によると、調査地は岡村遺跡の中心部より、やや北東部に位置する。調査地の基本的な層序は、①亀の川堤防盛土、②淡黄灰色砂質土（第1層）、③粗砂混じり灰色弱粘質土（第2層上部）、④灰色弱粘質土（第2層下部）、⑤淡青灰色粘土（第3層）、⑥淡黄灰褐色粘土（第4層）、⑦淡灰緑色粘土（第5層）、⑧淡青灰色粘土（第6層）である。第2層上部が中世の包含層で、第2層下部が弥生時代中期の包含層である。第3層および第4層からは縄文時代後期、晩期の遺物が、第5層からは、縄文時代後期の遺物が出土している。



第3図 基本層序

遺構は、縄文時代後期、弥生時代前・中期、中世、近世の5時期に大別できる。主たる遺構は溝と堤防の石垣である。遺物は、弥生時代中期（第四様式）の土器が大半を占め、縄文時代後期、晩期、弥生時代前期の土器がこれに続く。4区で検出した溝からは、弥生時代中期（第四様式）の土器類と共伴して銅鐸形土製品が2点出土している。（黒石）

4. 遺構と遺物

1区（第4・5・11図、図版2・6・10）

遺構 1区で検出した遺構は近世の堤防石垣（S V 01）と、中世の溝（S D 01）、弥生時代中期の自然流路（S D 02）である。

堤防石垣（S V 01） 延長25mにわたって確認した近世の堤防石垣である。石材は結晶片岩の板石を使用しており、横長の50cm～70cm程の大型の石材を平積みにし、その上に30cm程の小振りの石材を小口積みにして、これを繰り返して積み上げたものである。石垣裏込めからは伊万里の染付碗の破片が出土しており、^{註4}文献にみえる18世紀初頭の亀の川河川改修の際に築造された堤防と考えられる。

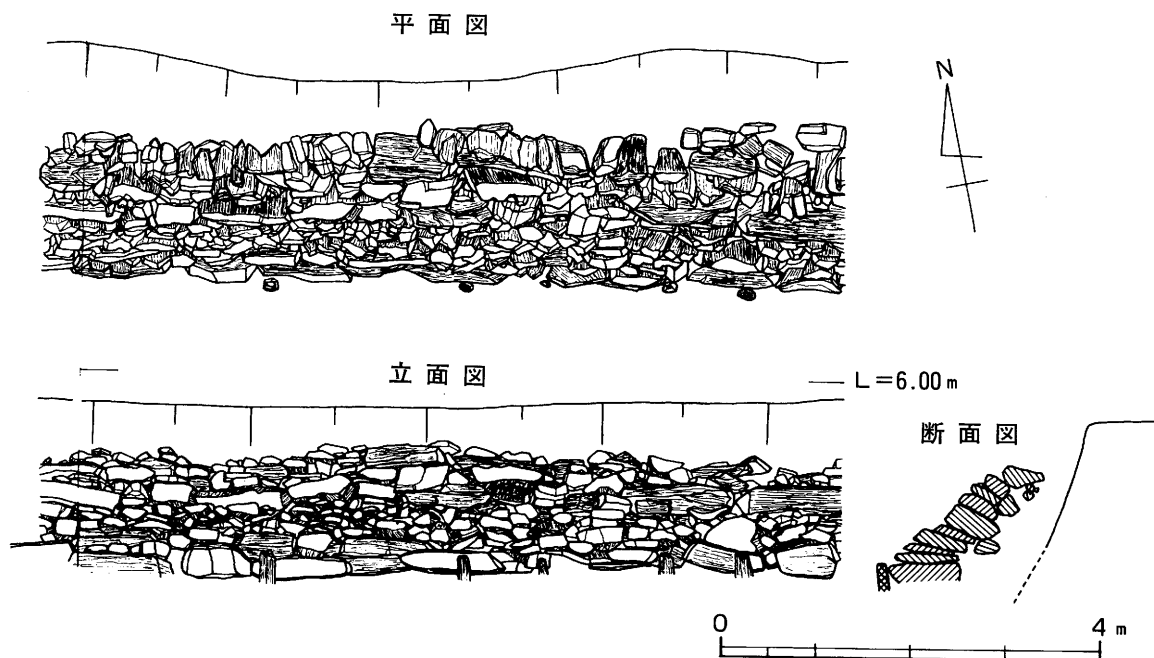
溝（S D 01） 幅約0.5mの断面U字形の溝である。瓦器碗の破片が出土しており、中世の溝と思われる。

自然流路（S D 02） 幅約7～8m、深さ1.0mを測り、土層の堆積状況などから自然流路であると考えられる。方向は北北東より南南西に流れている。土層は3層に大別でき、弥生時代中期（第四様式）の土器が上層から下層にかけて大量に出土しており、短期間に埋没したようである。

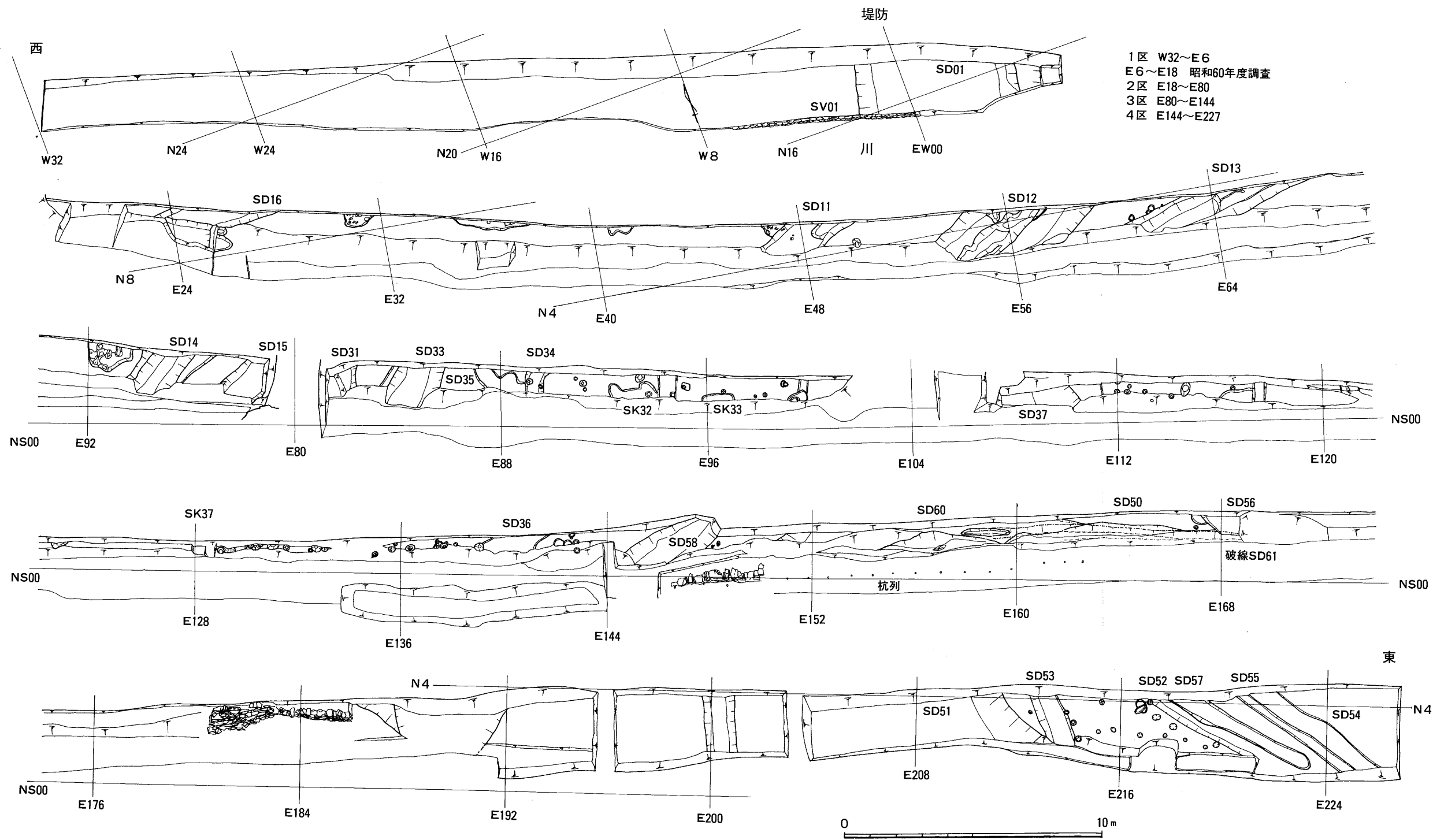
遺物

S D 02の遺物 1は口径約30cmを測る大型の甕で、口縁端面に凹線文を施し、体部には叩き痕がみられる。2は口縁部が垂下する中型の壺で、口縁端面に浅い凹線文を施した後、円形浮文を3個1単位として貼り付けている。口縁内面には扇形文が施されている。3は中型の広口壺で、色調は淡明黄桃色である。4は小型の甕で、体部下半全面にススが付着する。5は薄手の体部に断面方形の把手が横位に付く水差形土器である。6は中空の高杯脚部で、杯部とは円盤充填で接合している。7は幅広で低脚の高杯脚部である。8は中空の高杯脚部で脚台部の3箇所に2個ずつ円孔を穿っている。9は中実の高杯脚部で、脚柱部には上から下まで凹線文が施されている。13は磨製の石包丁で、両面とも研磨されている。材質は粘板岩に類似し、色調は黒灰色である。101～104はS D 02底部の黒色粘質土から出土した木製品である。104は長さ約1.4m、最大幅15cm、最小幅9cm、厚さ約4cmを測り、片面を平滑に削り、一方の横側面を直角に削り出し、段を付けている。材質は広葉樹で、建築部材であると考えられる。101は木製の杭で先端を鋭利に加工している。102は木製鋤の末製品で鋤先部分であると思われる。103は容器のような形状を呈する木製品であるが用途は不明であり、炭化している。

その他の遺物 10はS D 01出土の瓦器碗で、内外面とも磨滅が著しい。11はS V 01出土の伊万里の染付碗である。12は第2層から出土した石包丁である。片面は研磨されており、もう片面は未調整で、石材は淡灰緑色の結晶片岩である。



第4図 1区 堤防石垣実測図

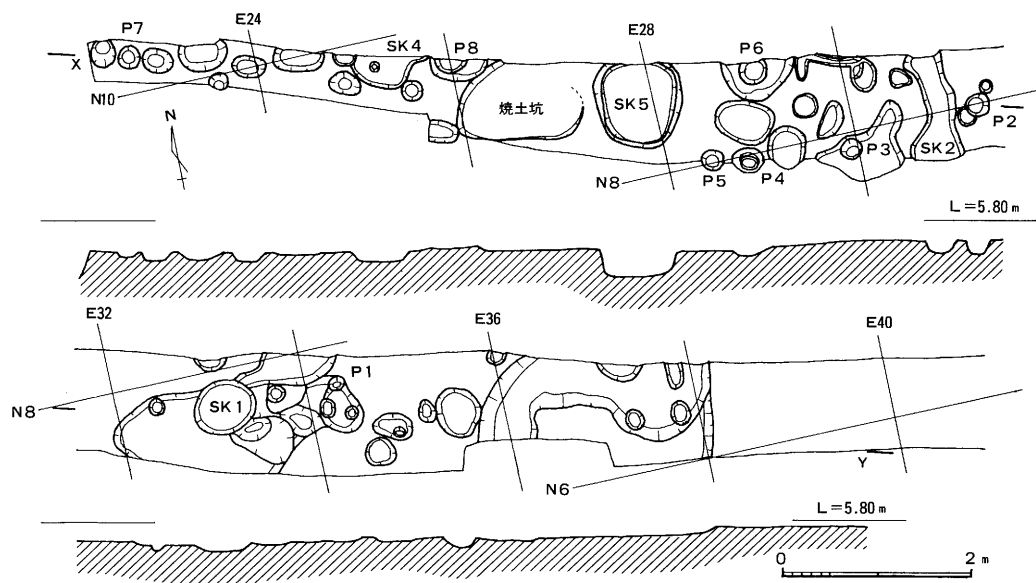


第5図 遺構全体図

2区 (第5～7・12図、図版7・10)

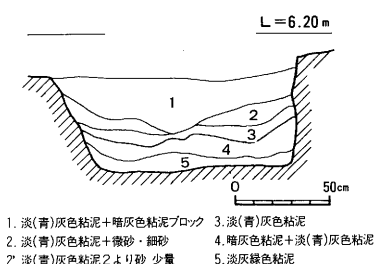
2区の遺構・遺物は、縄文時代後期と弥生時代中期に大別できる。縄文時代の遺構は調査区の西半に集中し、基本土層第4層をベースとしている。縄文時代の遺物分布は第3層に集中し、特に遺構密度の高い部分から多量の遺物が出土している。弥生時代の遺構は調査区全域にみられ、溝・不定形土坑がある。弥生時代遺物包含層の遺物量は調査区東端に集中し、3区へ続いている。

遺構 縄文時代の遺構(第6図) 縄文時代の遺構は、E22～E38にかけての狭い範囲に集中し、この範囲が一段落ち込んだ状態を示す。遺構は、土坑と小柱穴状の遺構が重複して存在する。SK5は一辺約84cm・深さ30cmを測り、隅丸方形を呈する。埋土の下層には厚さ約1～3cmの炭層が認められ、人為的に敷いたものと考えられる。炭層より下部では出土遺物は皆無である。焼土坑は長軸1.2m・短軸0.8m深さ約4cmを測り、楕円形を呈する。焼土坑は調査区北壁の土層を観察したところSK5より後出する可能性が考えられる。その他、深さ8～10cmを測る円形(SK1)や不定形土坑(SK2・4)がある。小柱穴状の遺構(Pで呼称)のうち、P2は直径26cm・深さ15cmを測り、中から鉢(22)があたかも埋置された状態で出土した。また、狭い調査範囲のため不明確ではあるが、P2・3・5・8が弧状に並ぶ。また、遺構のベースとなる第4層から下部には、調査区全域に、厚さ20～60cmに及ぶ自然堆積層(第4層～6層)が認められ、上述した遺構群よりも古い福田KII式ないし四ツ池式に併行する深鉢(105)が出土している。このことは、岡村遺跡の所在する微高地の北辺部が早くも縄文時代後期前葉に形成されたことを物語っている。



第6図 2区 縄文時代遺構全体図

弥生時代の遺構（第5図）、弥生時代の遺構は、溝6条・不定形土坑5基、小柱穴数ヶ所がある。基本的に溝の底は、北東から南西方向に向って低くなるが、調査範囲が狭いため流れの方向を確定できなかった。溝内の埋土の状況から判断して、滞水の認められる溝（S D12～16）と認められない溝（S D11）に区別できる。S D11は、幅1.7m・深さ0.3mを測り、溝内北側に杭跡が存在する。S D12は、再掘削の認められる溝で、西側の深い部分が古く、東側の浅い部分が新しい。各々の規模は、西溝で推定幅2.5m・深さ0.6m、東溝で幅1.85m・深さ0.5mを測る。S D13は幅1.6m・深さ0.3～0.4mを測り、溝内底で低い段が付く。S D14は、幅2m・深さ0.65m



第7図 S D15 土層図

を測り、断面U字形を呈する溝である。S D15は、幅1.3m・深さ0.5mを測り、断面逆台形を呈する溝である。溝の埋土の基本堆積は、第7図に示すように暗灰色ないしは灰色のブロック土を含む人為的と考えられる汚ない埋土（第1～3層）と滞水時の自然堆積（第4・5層）とに区別でき、埋土の状況から判断して、各溝は機能を喪失した直後に人為的に埋められた可能性が強い。

遺物 縄文時代の遺物 縄文時代の遺物は、大半が包含層から出土した縄文土器である。14には波状口縁に沿う3条の沈線文と体部に直線による三角区画文が施されている。体部の文様帯には沈線以前に浅く細い縄文が施される。15も14同様に波状口縁に沿う3条の沈線文が施され、波頂部に円形文を配する。16は口縁端部と屈曲部に低い段を貼付け、篋による刻みを施す。波頂部は小さい山形を呈し、屈曲部にかけて貼付け浮文を垂下させる。外面屈曲部より下位にスガが付着する。17も口縁部から屈曲部にかけて縄文が施され、沈線が施される。18・19は体部に条痕が施された粗製深鉢、20・21は屈曲部の下に文様帯をもつ小型の浅鉢と考えられる。22は碗形を呈する浅鉢で、内外面共に丁寧に磨かれる。105は沈線が深く鋭角である。106は口縁部から屈曲部にかけて文様帯を構成する。落ち込み堆積層と第3層の縄文土器は、一括性に富むもので一乗寺K式を主体とし、少量の北白川上層式第3期ないし元住吉山I式を含むものと考えられる。落ち込み堆積層と第3層全体の縄文土器の組成は、深鉢721点（97.6%、内有文21%・無文76.6%）、浅鉢9点（1.2%）、注口土器9点（1.2%）で構成され、深鉢が圧倒的多数を占める。その他、少量のスクレパー（118・119）、石鏃（126）、石錘が出土している。

弥生時代の遺物 弥生時代の遺物のうち、溝内から出土した遺物はごく少量である。甕23は口縁部が比較的短く外傾し、体部は張りが弱い。外面は細い幅の篋削りが施されており、方向は頸部付近では横方向に右から左へ、下半では底部から上方へ左上りに削られている。底部を除く外面全体にスガが付着する。第三様式古段階に属するものである。24は第一様式の広口壺、25は第三様式古段階の広口壺、26・27は第三様式中段階の直口壺である。

以上から弥生時代の溝の時期は、出土遺物と土層から判断してS D12西溝が第三様式古段階、東溝は第三様式中段階、S D13は第三様式古・中段階、S D11・14は第三様式古段階、S D15・16は第三様式から第四様式にかけてである。(土井)

3区 (第5・13図 図版4・8～10)

遺構 遺構の検出は全て第2層下部を除去した段階で行った。第2層下部を切り込む遺構の存在も認められるが、遺構および第2層下部出土遺物を見るかぎり、さほどの時期差はなく、全て弥生時代中期のものである。検出した遺構には、溝・土坑・ピットがある。

S D33 幅1.8m、深さ0.7mを測り、延長1.6m分を検出した。当地区で検出した遺構の中では最も多くの遺物(32・33・36～39・112)が出土しており、その大半は、3層に大別できる溝埋土の上層からのものである。上層は弥生時代中期の遺物包含層である第2層下部に近似する砂質土、中・下層はいずれも粘質土であるが、下層には若干の礫が含まれる。

S D36 調査区東端で検出し、幅1.6m、深さ0.1mを測る。出土遺物には40・43がある。

ピット 当調査区の全域から50余のピットを検出している。直径0.1～0.4m、深さ0.1～0.5mと様々であり、掘形も円形のものの方角のものがある。出土遺物の大半は細片であり、図化し得ないが、全て弥生時代のもと考えられる。ピットの多くは検出状況から、溝よりも新しい時期のものであり、古墳時代から中世のものも含まれている可能性がある。

その他、縄文時代遺物包含層を掘り下げる際に、炭・焼土を含む10～20cm前後の深さをもつ、土坑状の凹みを検出したが、遺構であるか否かは確定できなかった。

遺物 出土遺物の時期は縄文時代後期から近世と長期に渡るが、その大半は弥生時代中期の土器である。これらは主として第2層下部より出土し、特にE81～E100、E136～E144からは多量に出土している。第3層以下からは、縄文時代後期前葉から晩期にかけての遺物が出土するものの量的には少ない。

弥生土器 壺・甕・高杯・鉢等がある。直口壺には口縁部に断面三角形の貼付突帯をもつ28・30～33と、凹線文と櫛描直線文を施すもの(29)とがある。34～36は広口壺の口縁部である。34は内外面に刺突文を、35・36は拡張させた口縁部端面に凹線文を施し、円形浮文を貼付ける。111は口縁部端面に斜格子文、内面には列点文を施す。41は口縁部の内面に突帯を貼付ける。桃褐色を呈し、胎土も密である。甕(42・43)は頸部に篋描沈線文をもち、42は口縁端面に刻み目を入れる。底部(40)には靱痕が認められる。44・45は貼付け突帯に刻み目を入れたもので壺の肩部と考えられる。46は片口の鉢である。49はミニチュアの壺で、胎土・焼成とも良好である。以上の土器は28～40・49が中期(第三～四様式)、41～46が前期(中・新段階)のもと考えられる。

縄文土器 50は肥厚させた波頂部端面に刺突を行い、外面には沈線を入れる。51は口縁部を内側に拡張させ、深い沈線を巡らせ、その外側に刻み目を入れる。52は円形文・孤状文・区画文で

文様体を構成する。53は口縁外面に指頭圧痕文を施し、内面は丁寧に撫でる。54は口縁部に『D』字状の刻み目突帯を巡らす粗製の深鉢である。50・51は後期前葉の四ツ池式に、52・53は北白川上層式1期に、54は晩期の船橋式に比定できる。

その他の遺物としては、紡錘車（47・48・112）がある。47・48は土器片の転用、112は焼成前に穿孔が行なわれており、当初より紡錘車として製作されたものである。重量はそれぞれ、47は7.42g、48は6.31g、112は7.19gである。石器には石鏃（121・122・125・127～132）、スクレイパー（119）石包丁、打製石斧等がある。

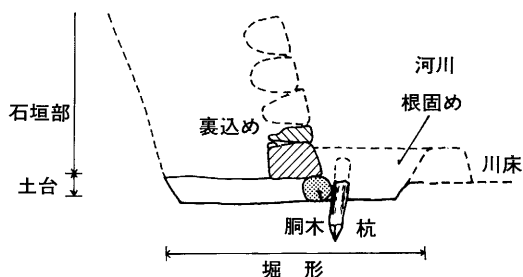
4区（第5・8～10・14図 図版5・9・10）

遺構 4区で検出した遺構は近世の亀の川堤防・弥生時代から古墳時代の溝12条、中世の溝1条、時期の不明なピット（小穴）群がある。

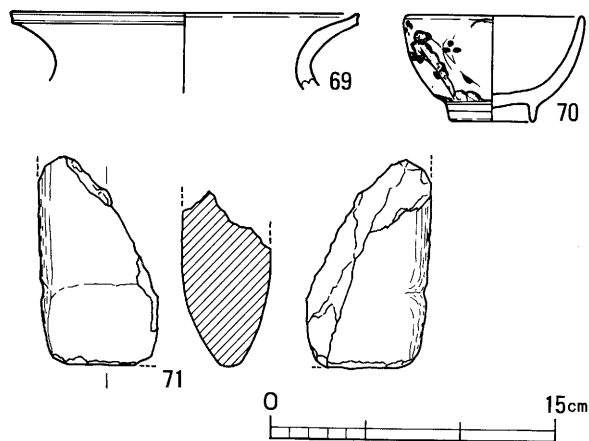
近世の亀の川堤防は石垣によるもので、最も残りの良い所で7段分、^{註5}土台から0.75mの高さを測る（第8図）。石材は結晶片岩を用い、積み方は小口積みの部分と平積みの部分とがある。傾斜は部分的に異なるが、おおむね65度～80度に積まれている。裏込めには拳大から人頭大の川原石が使用され、その中に太形蛤刃石斧が混入していた（71）。その他弥生時代から古墳時代、近世の遺物が出土した。近世の遺物には「くらわんか茶碗」（70）が見られ、石垣が構築された1706

^{註6}年～1707年の年代とも符合する。石垣の下からは長さ約4m、直径15cmの表皮がついたままの丸太（胴木）が、石垣前面端に合致する形で検出された。この胴木を固定するための杭が打たれ、石垣の下になる部分は砂礫によって幅0.7mを測る頑丈な土台をつくりあげていた。石垣を構築するための幅1.2mの掘形も検出できた。

弥生・古墳時代の溝の多くは北西方向に流路をもつ。中でもS D51は幅約20m、深さ0.8～1.8mを測る大溝である。堆積状況から幾重にも流れる細い溝が確認でき、溝の底には弥生前期の土器だけを包含する堆積層があり、埋土の最上層からは第四様式古段階の土器が出土しており、同時期には溝の機



第8図 堤防石垣断面模式図



第9図 堤防石垣裏込め出土遺物

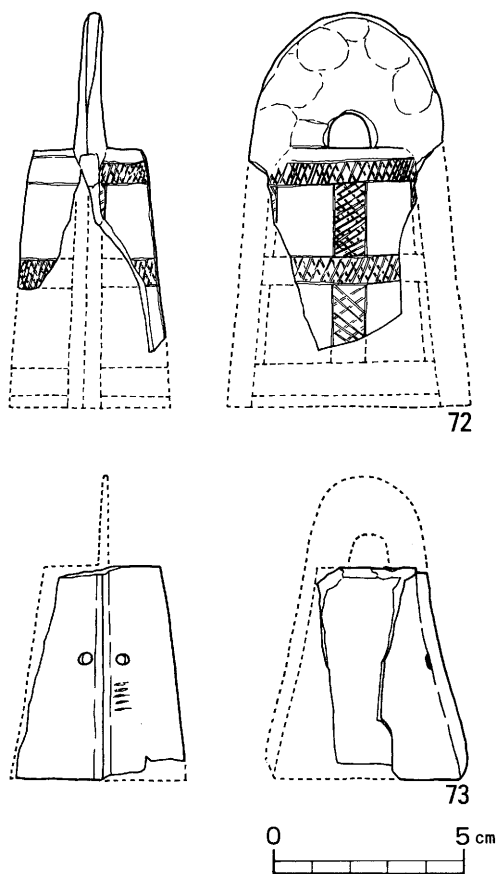
能はなくなっていたであろう。S D58は幅1.7m、深さ約0.9mを測り、調査区では唯一南西方向に流路をもつ。埋土は二層に大別でき、上層の暗灰褐色土から第四様式古段階の土器が、下層の淡灰色砂礫土からは第三様式の土器と共に青銅製品、用途不明の板材（幅30cm、長さ120cm、厚さ2cm）が出土した。S D56は溝の埋土や出土遺物の時期がS D58に似かよっており、両者が同一の溝とすると、北西方向のS D56と南西方向のS D58は孤状を描くことになる。その内側（南側）でS D58・56と平行する形でS D50を検出した。同溝の南側は旧擁壁に破壊され北側の肩部のみが残存する状況であったが、建物が多量に出土し、とりわけ注目すべき遺物に銅鐸形土製品2点、鶏形土製品2点、回転台形土器5点がある。S D60はS D50と重複し、切り合い関係からS D60の方が新しい。遺物はS D50に比べ少ないが、弥生中期の土器片が出土している。またS D50の下からS D59・61を検出した。古墳時代の溝S D52は、深さ10cmと浅いが、幅は4m以上と広い。遺物は土師器の他、須恵器杯身（TK43型式）が出土している。S D52の底で、新たにS D54・55・57を検出したが、遺物が皆無のため時期については不明である。S D53は南北方向の溝で幅1.3m、深さ0.2mを測るが遺物は見られなかった。

遺物

S D58 甕（55・58）には大型、小型があり、小型甕58は口縁端部を上方へ肥厚させ第三様式でも新しい様相を示す。56は無頸壺で口径21cmの大型品である。59～61は直口壺で59は口縁部に、60は頸部に貼付け突帯を有する。57は外面を丁寧に撫で調整し、内面は指押えによる成形痕が明瞭に残ることから大型の鉢とは考えにくく、むしろ形状からいわゆる「回転台形土器」と考えたい。^{註8}この他同溝からは高杯・広口壺・鉢等が出土しているが、高杯や壺の口縁には発達した凹線文が認められないことから第三様式に属するものと考えられる。また土器の他に特殊な遺物として空玉形の青銅製品が1点出土している。現状で直径12mm、高さ8mmの半球状を呈し、上部に直径6mmの穴がある。類例がなく用途の不明な青銅製品である。^{註9}

S D50 同溝から出土した土器には壺・甕・鉢・高杯・器台・脚台付鉢等があり、石器には石包丁（117）・石斧（124）・石鏃（133）・石剣がある。63～65は径30cm程度の円板に脚を付けたテーブル状の大型土器で、図示した他に2点出土している。形態及び内外面の調整もS D58出土の57と同様であり、回転台形土器と考えられる。また62も調整や大きさから回転台形土器の脚部と考えられる。特異な土製品としてその他に、鳥の形をしたものが2点出土している（114・115）。114は棒状に伸した粘土に嘴・鶏冠・肉髯を表現し、明らかに鶏を現わしたものである。^{註11}115は中空の胴部に別作りの頭部を挿入する穴がある。胴部には中実の脚が付されている。成形は手づくねによる。^{註12}愛知県朝日遺跡や兵庫県加茂遺跡に類似する土製品が見られる。^{註13}

銅鐸形土製品（第7図） 72はS D50の最上層から出土した。復元高10.4cm、鈕の高さ3.7cm、鈕孔の高さ0.9cm、舞の長径3.8cm・短径2.9cmを測る。鈕孔や舞に型持ち孔が表現されている



第10図 銅鐸形土製品実測図

は弥生中期後半に限定できる。

S D51 S D51の最上層からは高杯・壺・甕・鉢がまとまって出土した。壺には66のような口縁部に2条の凹線文を施す直口壺があり、凹線文の上下に波状文が見られる。また直口壺の他に二重口縁の壺があるが、他に類例をみない。胎土から在地産と考えられる。甕は口縁部に凹線文が施され、胴部外面に叩きが認められるものが多く見られる(69)。

縄文土器 調査区の最東端に設けたトレンチから、弥生の遺構検出面の約50cm下で出土した。出土した層は暗青灰色粘泥層で、多量の炭と共に後期前葉の深鉢1点と同時期の粗製の深鉢が4点認められた。深鉢は口頸部が外反し、頸部以下に曲線を主体とする磨消縄文を施す。粗製土器はいずれも外面に植物質原体による擦痕が認められる。(河内)

が、身の型持ちの孔や内面の凸帯については表現されていない。身に袈裟襷文で4つの区画を表現する。鈕と鱗は無文である。73はS D50の最下層から出土した。身の1/2と鈕は欠損している。鐸身高5.6cm、鐸身裾径4.4cmを測り、横断面は円形である。鱗の表現が見られるが、身には型持ち孔があり無文と考えられるが部分的に櫛のあとが認められる。銅鐸形土製品は県下では血縄遺跡^{註14}、亀川遺跡^{註15}の2例が知られているが、同一遺跡でしかも同一遺構から複数出土した例は初めてである。今回出土した土製品は4区袈裟襷文銅鐸を忠実に模している様に見えるが、最上段袈裟襷文の上に無文帯が存在する事や、内面に凸帯が見られないこと、73の様に銅鐸と少し掛け離れた形を有することから、銅鐸を実見していない人間が作ったものと考えられる。銅鐸形土製品と共伴した土器は、凹線文を多く施された土器が主流をなすことから第四様式^{註16}の古段階に位置づけられる。したがってこの溝

5. まとめ

今回の調査では、縄文時代後期前葉から近世にかけての遺構・遺物を検出した。具体的な内容は既に各地区毎に記述した通りである。以下、新たに得られた成果とその問題点、既往の調査との関連性について述べ、まとめとしたい。

まず、2区において縄文時代の遺構を検出したことが大きな成果の一つとしてあげられよう。これまでの調査では、遺構としては溝状遺構が検出されている。また、宮山東部に後期中葉、同南東裾部に晩期の遺跡の存在が知られており、今回の遺構の検出によって、縄文時代の遺構が宮山北西部にも広がりをもつことが明らかになった。なお、円弧状に並ぶ小柱穴状の遺構が堅穴住居を構成する柱穴と考えるならば、集落遺跡としての一端を示すものである。また東方に位置する亀川遺跡においても、縄文時代後期から晩期にかけての遺物包含層・遺構が確認されており、岡村・且来・亀川各遺跡の関連性が注目されるところである。

弥生時代の主要な遺構である溝は、いずれも第三様式から第四様式の時期に属し、多くは幅1.3～2mの規模のものである。これらは4区でのS D58・56、S D50・60の検出状況等から相互に関連性をもつと考えられ、環濠とも思われるが、調査区（幅）の狭さや、過去、当遺跡において検出されている住居跡が、弥生時代後期および古墳時代のものであり、弥生時代中期に属するものが検出されていないことなどから、現時点ではその可能性を指摘するにとどめたい。

4区検出のS D50・58・60は昭和53・54年度調査の211グリッドで検出されたS D-1・2と、2区S D16は昭和58年度調査のS D-6～8のいずれかとそれぞれ連続するものと思われるが明確にはできなかった。また、S D51は宮山東方に存在が推定されていた自然流路の一部と考えられる。

弥生土器はいずれも前期から中期にかけてのもので、後期に属するものは出土しておらず、これまでの調査結果と合致するものである。S D50・58出土の銅鐸形土製品・鶏形土製品・回転台形土器・青銅製品等は出土遺構の性格と共に、今後検討を行っていきたい。

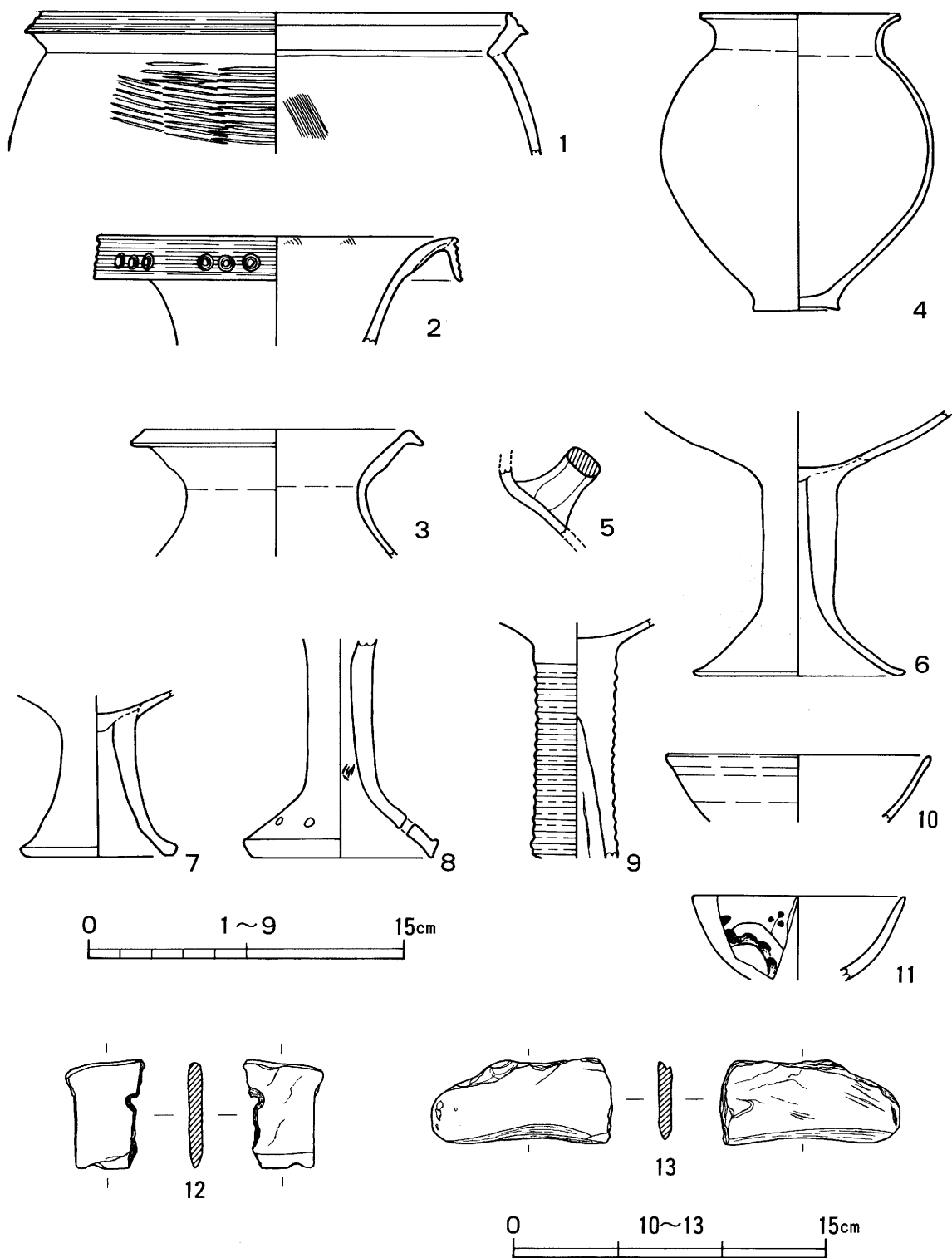
中・近世の遺構・遺物は量的には少いが、その中で、18世紀初頭に構築されたと記録にある堤防石垣の一部を検出できたことは大きな収穫であり、石垣構築の方法等も明らかにすることができた。

以上、今回の調査成果についての若干のまとめを記してきたが、今後も亀の川改修工事が予定されており、本調査区の東側および対岸部の調査が進むにつれ、今回明確にし得なかった諸点について、さらに解明が進むものと期待される。

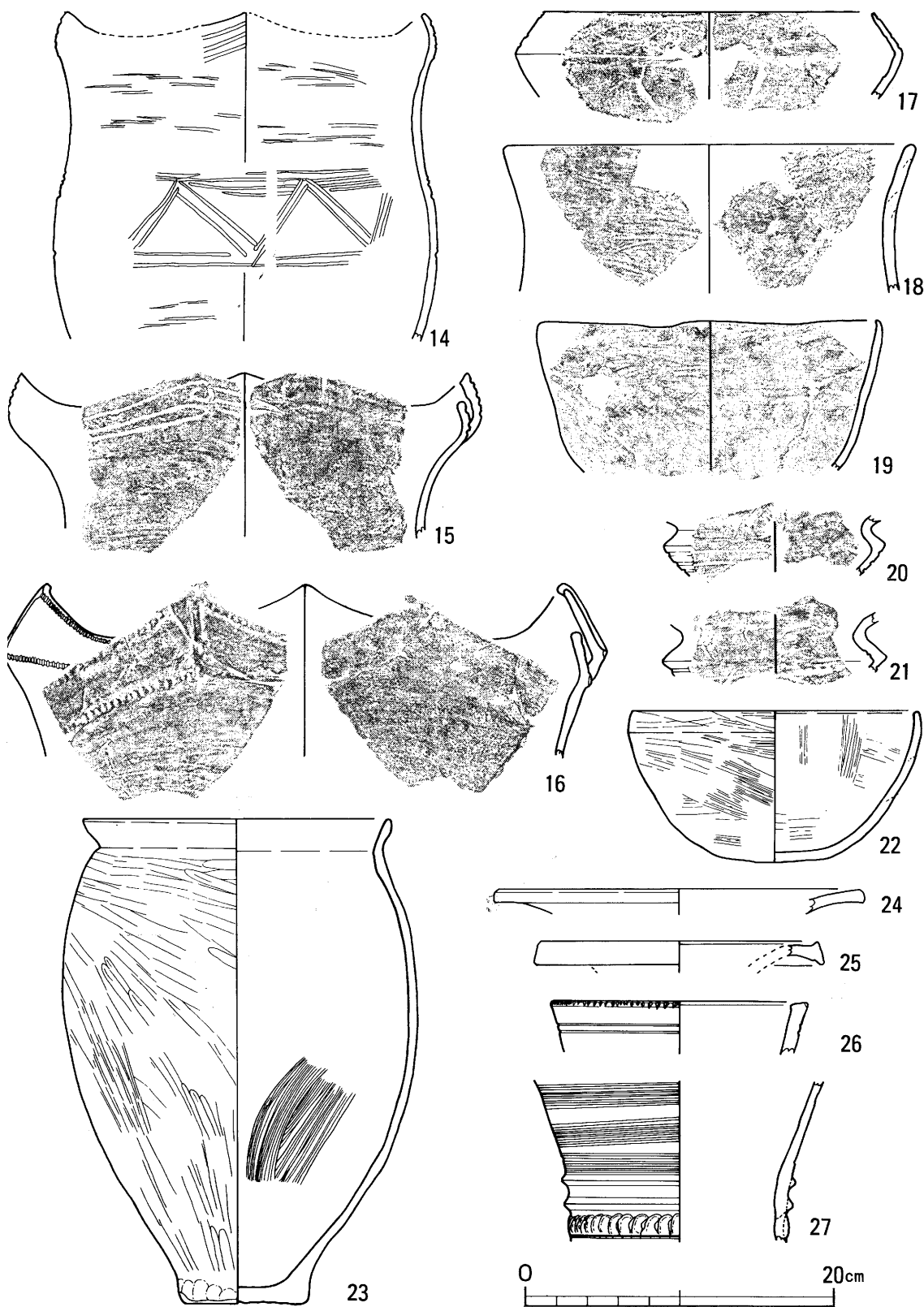
（井石）

〔註〕

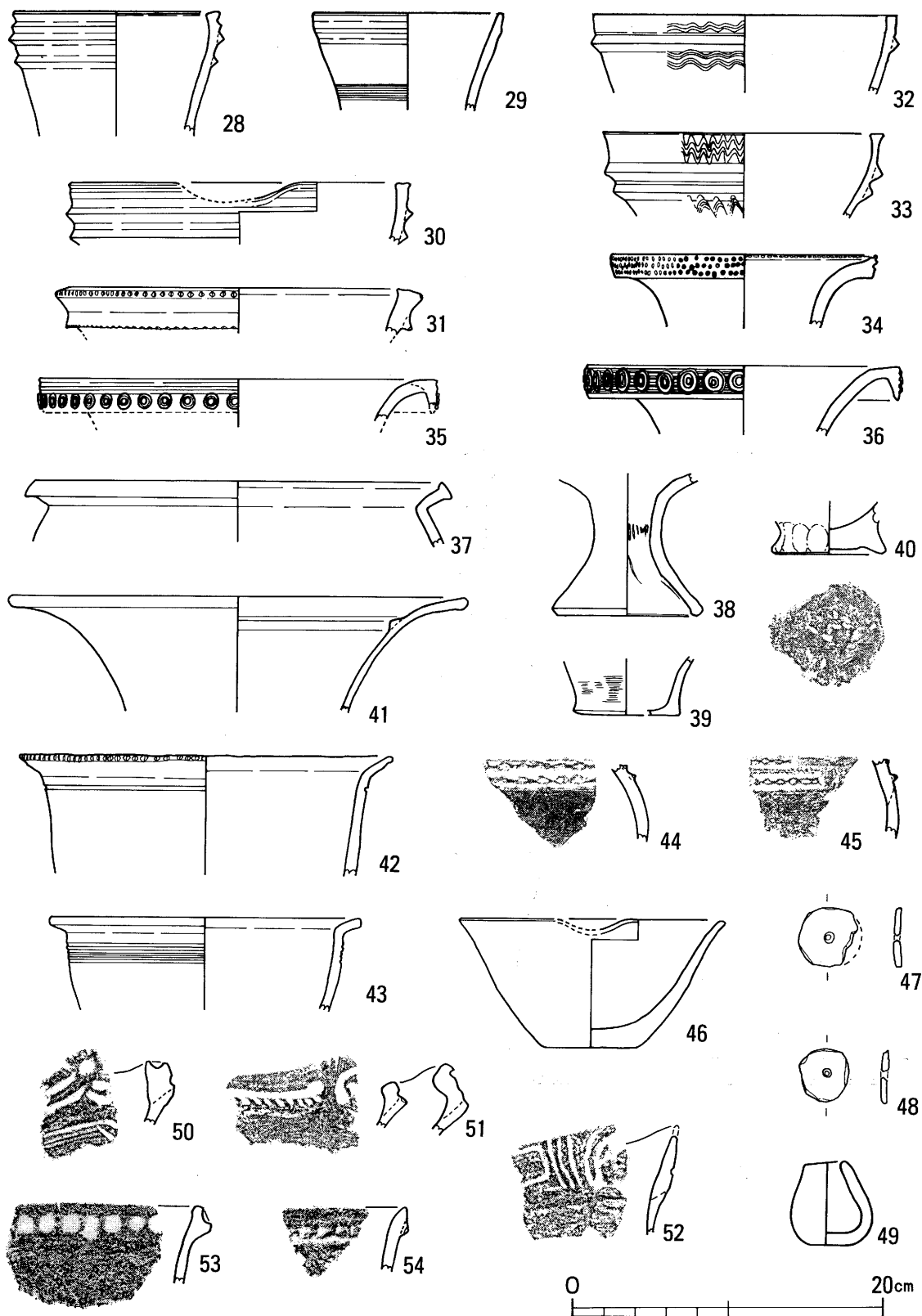
- 註1. 『岡村遺跡確認調査概報』 海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会 1980
『岡田八幡宮周辺遺跡群調査概報』 海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会 1981
- 註2. 『岡村遺跡発掘調査概報』 社団法人和歌山県文化財研究会 1983
- 註3. 註1に同じ。
- 註4. 池浦正春「近世中期海南地方の土木事業とその推進者たち」 『海南市史研究』第8号 1985
- 註5. 石垣の部分名称は高槻城本丸の調査報告書に従った。 『摂津高槻城一本丸跡発掘調査報告書一』
高槻市教育委員会 1984
- 註6. 註4に同じ。
- 註7. 長方形に加工した板材である。田舟の可能性もある。海南市教育委員会が1979年度に実施した調査で、No.211グリッドから類似する板材が出土している。出土状況もきわめて近いが、製品については限定されていない。註1文献『岡村遺跡確認調査概報』P.30～31
- 註8. このような特殊形態の土製品は、大阪府勝部遺跡出土例を初例とし、その後いくつかの遺跡から出土している。いずれも1～数個体の出土で、勝部遺跡では「回転台形土器」として報告されたが、その後、形が特異なために「用途不明の特殊土製品」・「鉢形土製品」等と報告されているものもある。調整方法や形状から鉢形土製品とは考えられず、私自身も作業台的な用途をもつ「器台」と考えている。本概報では、名称を従来言われているいわゆる「回転台形土器」に統一した。和歌山県での出土は今回が始めてで、隣接地域では和泉・河内・摂津に見られ、ほとんどが中期後半に属する。本例の場合、加茂遺跡・森小路遺跡の各出土例と共に、第三様式に属しており、比較的古いものである。
『勝部遺跡』 豊中市教育委員会 1972
『川西市加茂遺跡』 川西市教育委員会 1982
「森小路遺跡発掘調査略報」『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪教育委員会 1986
- 註9. 形状から言うなら古墳時代後期に多くみられる空玉に近い。また鈴の上半分にも見える。 いずれにしろ第三様式に属する小型特殊青銅製品の出土例は少なく類例をまちたい。
- 註10. 脚台部と脚部が出土している。県内では、和歌山市太田・黒田遺跡、宇田森遺跡、御坊市小松原Ⅱ遺跡、田辺市今福町遺跡から出土している。
- 註11. 弥生時代中期に属する鶏形土製品を出土した遺跡は福岡県下裨田遺跡と京都府中久世遺跡の二ヵ所である。 寺沢薫他「シンポジウム鶏の考古学」『古代学研究』114 1987
- 註12. 『朝日遺跡』 愛知県教育委員会 1982
- 註13. 『川西加茂遺跡』 川西市教育委員会 1982
- 註14. 『血縄遺跡発掘調査概報』 橋本市教育委員会 1986
- 註15. 『亀川遺跡Ⅴ』 海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会 1985



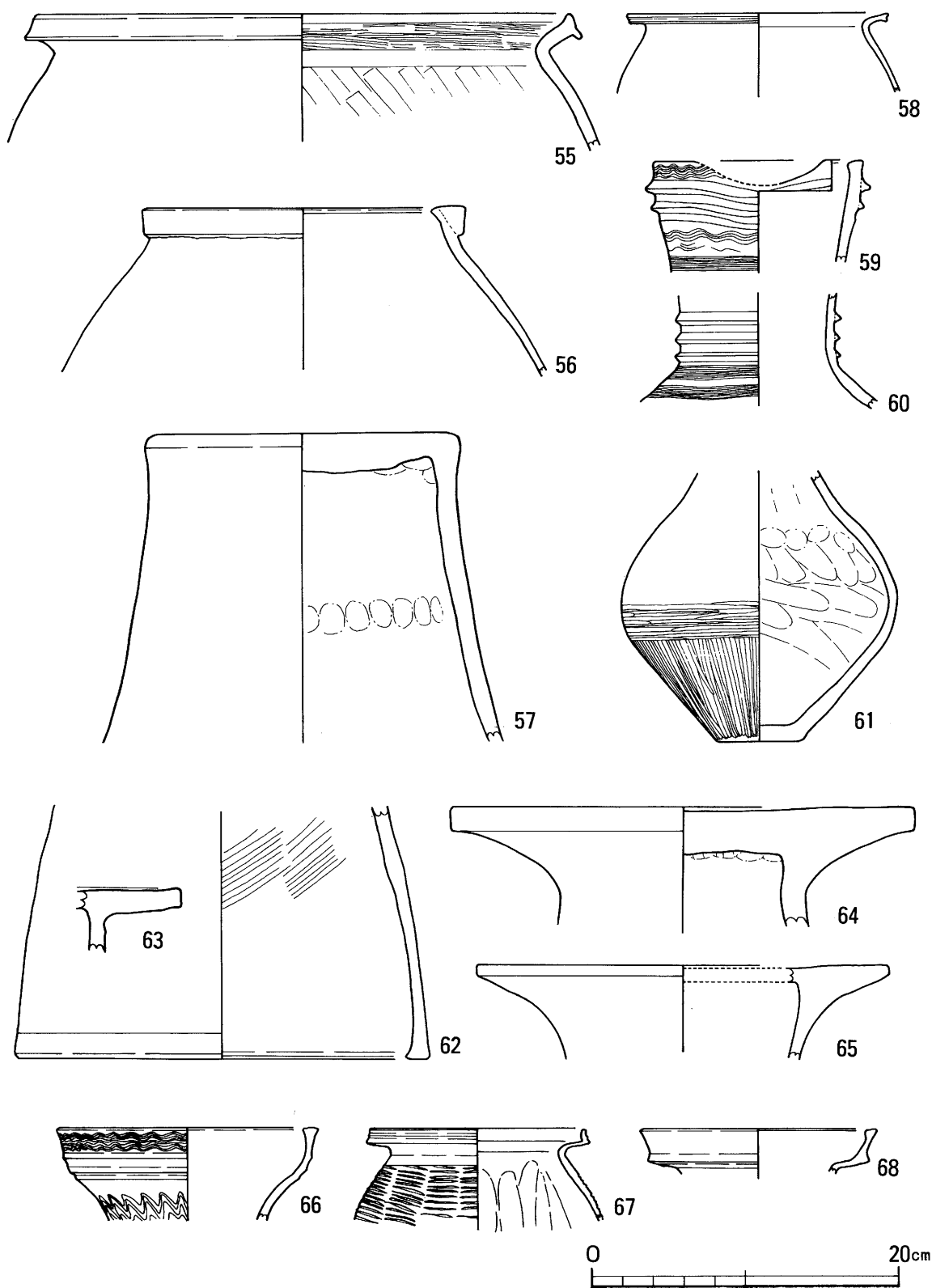
1~9・13—SD02, 10—SD01, 11—SV01, 12—第2層
第11図 1区 出土遺物実測図



22—縄文P2, 23・25・27—SD14, 26—SD12 17・21—3層, 他は縄文持ち込み堆積層
第12図 2区 出土遺物実測図



32・33・36～39—SD33, 40・43—SD36, 35—SD35, 41・46—SD37 47—SD34, 他は包含層
第13図 3区 出土遺物実測図



55~61—SD58, 62~65—SD50, 66~68—SD51

第14図 4区 出土遺物実測図



遺跡遠景（南から）



遺跡近景（南東から）



1区 SV01 (東から)



1区 木器出土状況 (南から)



2 区 縄文時代遺構全景（西から）



2 区 弥生時代遺構全景（東から）



3 区 遺構全景（東から）



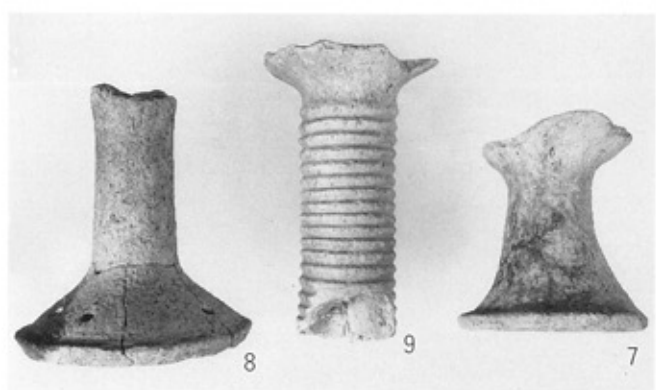
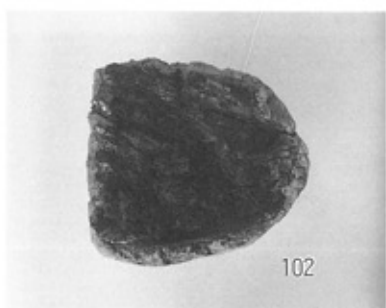
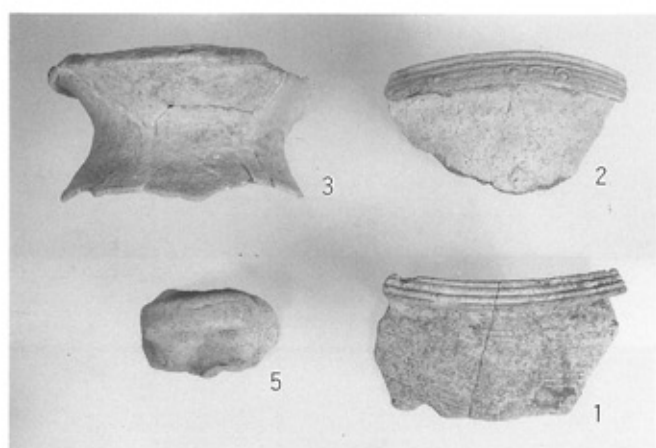
3 区 西半遺構全景（東から）



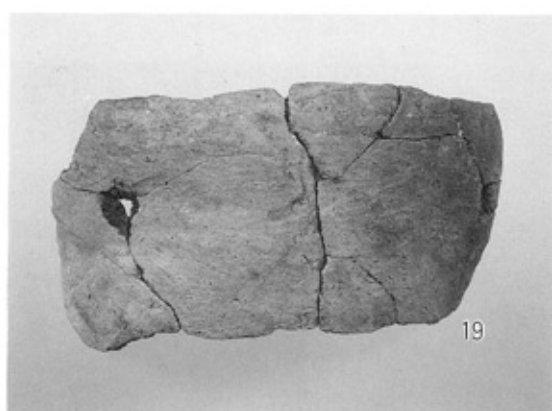
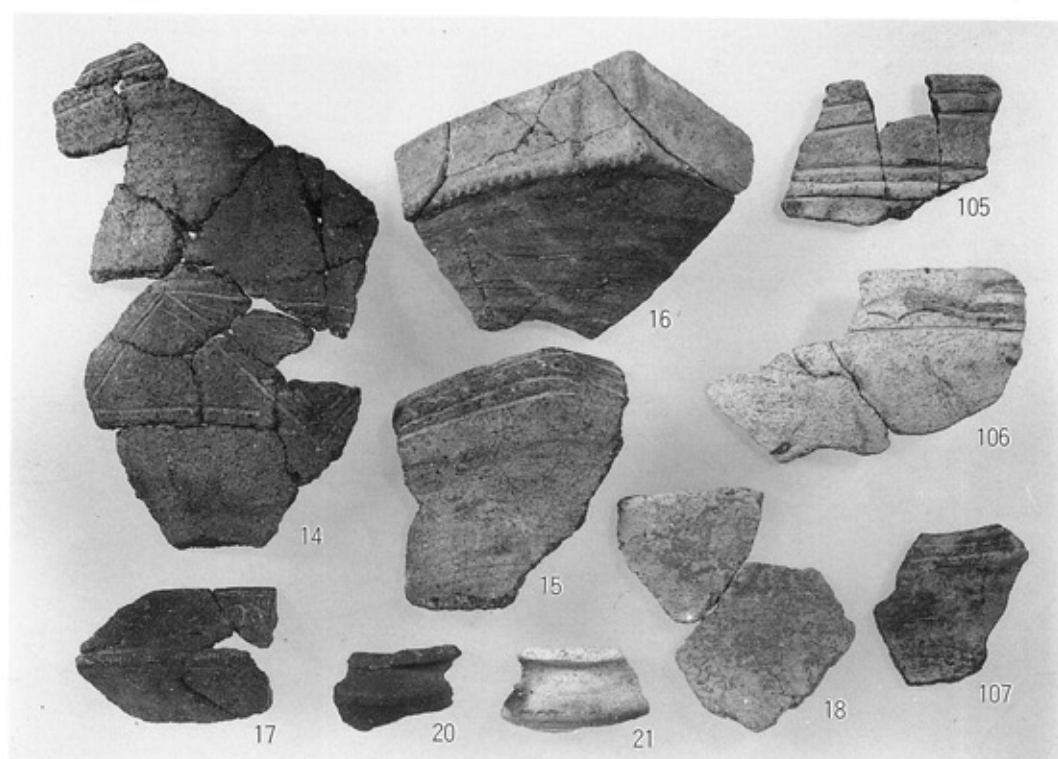
4 区 遺構全景（西から）



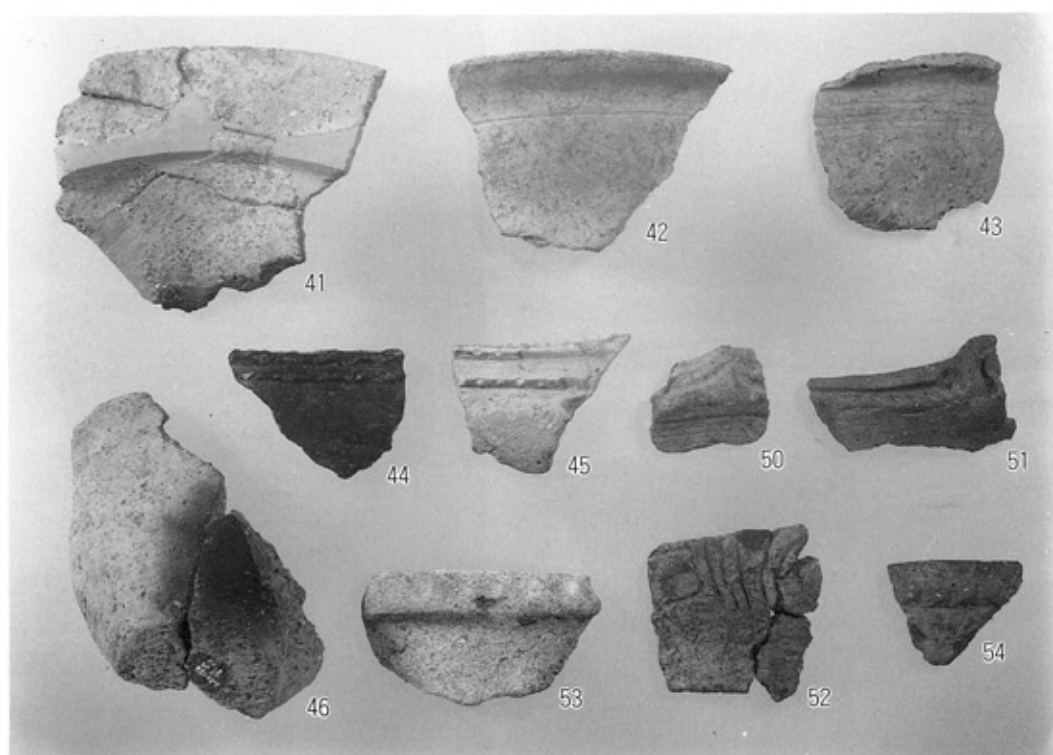
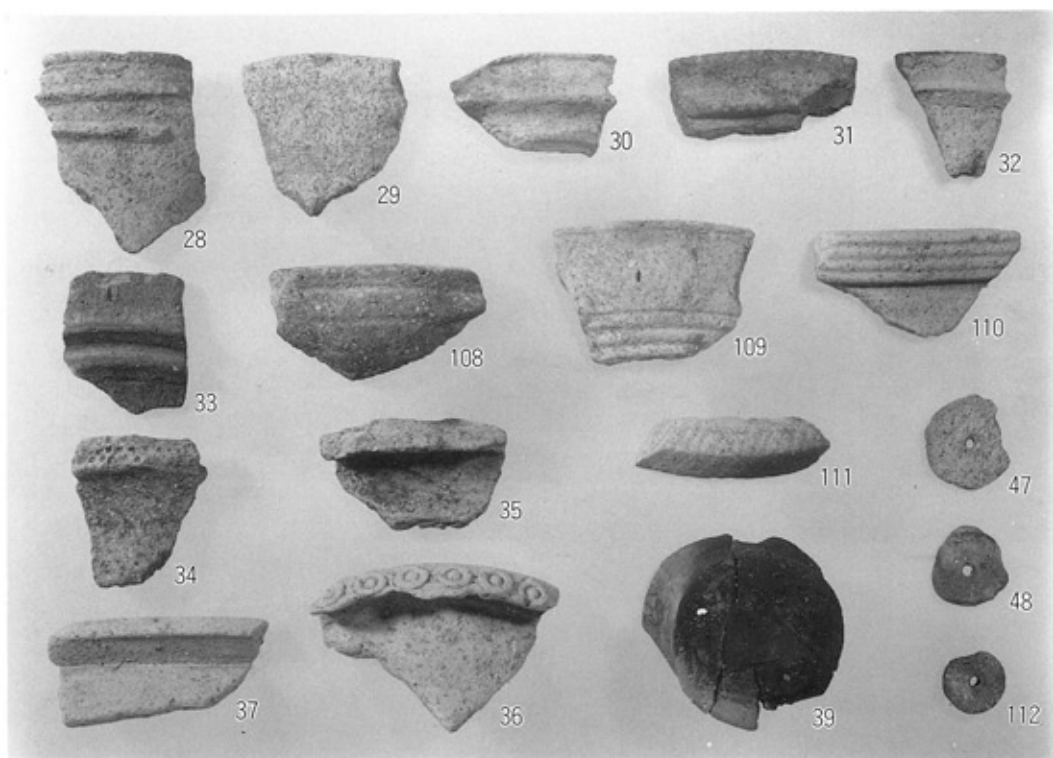
4 区 S D58遺物出土状況（南から）



1 区出土遺物



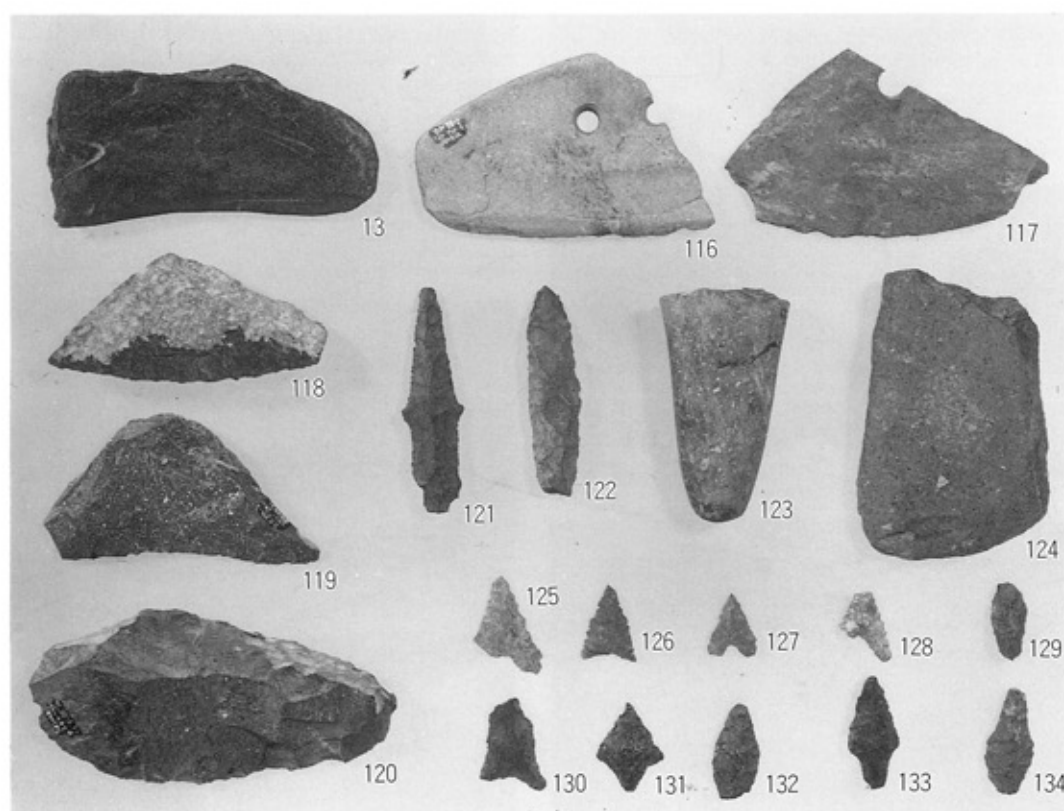
2 区出土遺物



3 区出土遺物



3 区出土遺物(38, 40) 4 区出土遺物(57, 61, 64, 113, 114, 115)



1 区出土遺物(13)

3 区出土遺物(119, 121~123, 125, 127~132)

2 区出土遺物(116, 118, 120, 126, 134)

4 区出土遺物(72, 73, 117, 124, 133)

1988年10月31日

岡 村 遺 跡

— 亀の川中小河川改修工事に伴う弥生遺跡発掘調査概報 —

発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷 西岡総合印刷株式会社